

『義経千本桜』

解説

『義経千本桜』は並木千柳(宗輔)・二代目竹田出雲・三好松洛による合作で、延享4年(1747)11月大坂竹本座の人形浄瑠璃作品として初演され、翌年すぐに歌舞伎化された。その後、人形浄瑠璃、歌舞伎双方の興行で屈指の人気演目となり、『仮名手本忠臣蔵』『菅原伝授手習鑑』等とともに義太夫狂言の名作に数えられることになった。全五段の中で、「狐忠信」を主人公とする今回上演の場面は「四段目・切」場にあたり、名作への評価とその人気ぶりから「四の切」と言えば、当作を指すことになっている。

本作の魅力としては、狐が人間に化けて主従関係になるという幻想性、そして子狐が見せる亡き親への強い愛情、さらにその畜類の情愛が肉親同士で争う人間世界への諷刺となっていることなどであろう。これに加えて“狐詞”、“狐手”などの動物に模する演技術、そのほか大道具を使った“階段抜け”、“欄干渡り”なども含めた外連(ケレン)の演出が随所に施され、歴代の名優たちにより練り上げられた藝が現代に伝わっている。

本作はその内容のわかりやすさ、娯楽性から歌舞伎初心者には最適の入門演目であり、国立劇場主催の「歌舞伎鑑賞教室」においても度々取り上げられている。

ここまでの概略

平家追討に大きな戦功をあげた源義経は、それを嫉む周囲からの讒言によって兄の頼朝と不和になる。かねてから所望していた初音の鼓を朝廷から賜るも、これも「謀反の証拠」との嫌疑をかけられ、都落ちを余儀なくされる。

伏見稲荷に差し掛かった義経は、同道を乞う愛妾の静御前に、初音の鼓を形見として渡して去らせようとする。その静が頼朝方に襲われる危急を、源家重臣の佐藤忠信が駆けつけて救い、義経から「源九郎」の名と愛用の着長(きせなが)を与えられる。忠信は主命により静を守護し落ち延びるが、なぜか執拗に鼓に心を掛ける。(伏見稲荷の場)

静御前は義経が隠れ住む吉野へ向かい、桜満開の山中を急ぐ。供の忠信はなぜか度々姿を消し、初音の鼓を打つと不思議にも戻ってくる。四方の景色を眺めながら少し戯けてみたり、或いは過去の軍物語をしながらの主従の道行。二人は義経との再会を待望し、足を早める。(吉野山の場)

あらすじ

・河連法眼館の場

敵方からの追っ手を逃れた義経主従は、吉野一山の検校職、河連法眼の館に匿われている。法眼はかつて幼き義経を育てた阿闍梨の弟子であり、頼朝方に縁者を持つ妻飛鳥の性根を試してまで、義経の守護に心を尽くす。

山深いこの地に佐藤四郎兵衛忠信が駆けつけてきた。しばし母の看護のため、義経の許を離れていた忠信。主君との久しき対面に胸を熱くする。義経は伏見で託した静御前の安否を忠信に問うが、忠信にしてみれば義経との対面は屋島の合戦以来。主君の問いに答えられず不興を買い、義経近臣の駿河次郎や亀井六郎に詰問されても、伏見での出来事など預かり知らぬことであった。そこへ不思議なことに、もう一人の忠信が静を守護して到着したとの知らせ。義経は懐かしさのあまり涙ぐむ静を労りながら、いま又姿を消した供の忠信のことを訊ねてみる。確かにその場に居る忠信と、供してきた忠信の様子はどこか違う。義経は詮議を静に任せ、先に到着した忠信を奥へ引っ立てさせる。

供してきた忠信を訝しむ静は、思いついて初音の鼓を打ってみる。すると、どこからともなく忠信が出現した。静は怪しい振る舞いをする忠信に刀を抜いて詰め寄った。窮する忠信はしばし逡巡していたが、ついにその本性を顕した。偽の忠信の正体は狐であった。この狐は大和国に千年功経る狐の子で、実はその両親は雨乞のために「初音の鼓」の皮にされていたのである。子狐は皮に宿る親の精魂を慕い、孝行のため付き添っていたのだった。狐に産まれた因果を想いながら、一日たりとも親を思わぬ日はなかった。しかしこのままでは義経を騙し、本物の忠信にも迷惑をかける。子狐は義経から賜った「源九郎」という名を冥加に感じ、暇乞いして去って行く。

静は子狐のあまりのいじらしさ、運命の哀れさに涙する。奥で聞いていた義経も、親兄に孝を尽くせなかった我が身を省み、源九郎狐を呼び返させた。そして畜類ながらの孝心と静を守護してくれた働きを褒め、初音の鼓を授けることとした。喜びに打ち震える源九郎狐。その御恩返しにと、察知した吉野の悪僧達によるこの館への夜討計略を伝え、通力を使って敵を館へ引き入れて翻弄した。これで親と離れることはない。源九郎狐は歓喜して鼓を携え、飛ぶが如くに去って行くのであった。

(鈴木英一)